25 journal
society&business Tokyo25 journal
執筆協力 編集室システムU　okamura.nobuyoshi@gmail.com

和楽路会新年会 90人が集う

「青梅市のこれから」大勢待市長が講演

青梅市のまちづくりに住民の立場から協力する東部地域の親睦団体「和楽路会」の新年会が1月28日、霞共益会館（青梅市野上町）で開かれた。来賓、会員ら約90人が参加し、新春のあいさつを交わした。

同会は1941（昭和16）年に霞地区青年団有志が郷土愛、団結、友情を掲げて設立。これまで、政治、経済、文化などの講演会を開くなど活発な活動を行ってきた。

関塚博美会長は「今年は昭和100年に当たる。昭和16年創立の和楽路会は地域の振興と親睦に力を注ぎ84年の歴史を刻んできた。創立100年に向け確かな歩みを続けたい」とあいさつした。

大勢待利明市長、森村隆行都議、松永重徳JA西東京代表委理事組合長、下田盛利霞共益会会長、若手でつくる第二和楽路会の山下望会長らが祝辞を述べた。長老の山下英夫さんの「おめでとうございます」の発声で乾杯し、懇親に移った。

開会に先立ち、大勢待市長が「青梅市のこれから」と題し、講演した。一昨年11月に行荒れた市長選の公約の進捗状況を報告。明星大跡地については、能登地震で被災した日本航空学園が移転しており、行政、市民との交流が進んでいる、学校給食の無償化は多摩26市に先駆け昨年7月に開始している、公共交通の導入はグリーンスローモビリティを本格運行させるほか、マイナンバータクシーの試行導入やライドシェアを進めていくなどとした。

反面、新市民ホール建設は見積りが218億円となり、財政的な側面から改めて積算作業を行っているという。

課題として、新市民ホール建設のほか、物価高騰と人件費増で青梅総合医療センターの財務が悪化しており、10億円の財務融資が必要になっているとした。人口は自然減の反面、社会増となっており、動画サイトなどをフル活用し、青梅市の良さをアピールしていくとした。

約90人が参加し、新春のあいさつを交わした

公約の現状などを語る大勢待市長

卒業生の繋がりより強く

菅生川蝉会の新年交歓会

東海大学菅生高校（あきる野市菅生）の同窓会、菅生川蝉会の新年交歓会が2月1日、ホテルエミシア東京立川で開かれた。合同で行った38期生成人を祝う会の出席者と教職員を含め約150人が参加した。

同会は1期生が50歳の節目を迎えた2018年4月に発会した。昨年、渡邉弘行さんから会長のバトンを受けた青木龍太さんは「1期生はあと2年で還暦を迎え、あと7年で創立50周年を迎える。卒業生の繋がりをつくる菅生マップづくりを進めたい」とあいさつした。

島田幸成理事長、峰岸英仁校長、橋本健司後援会長らが卒業生の頑張りと在校生の活躍を称える祝辞を贈った。席上、同会から新成人にタンブラーが贈られた。

昨年に次ぎ23期生でものまね芸人のちなっぴーさん（本名・先久千夏）のステージなどが花を添えた。

同高は1982（昭和57）年に開校。これまで1万9000人ほどの卒業生を送り出し、社会にあって存在感を高めている。運営する菅生学園は中等部、初等学校も設立。一貫教育が行われている。

また、企業誘致、開発、観光振興に取り組むほか、税金の収納率を高める取り組みやふるさと納税の充実などで税収アップを図っていくという。

「職員には新しいアイデア、チャレンジを促している。青梅市の替わっていく姿を市民の皆さんと共有していきたい」と力を込め、締めくくった。

同窓の笑顔があふれた新年交歓会

ロケットエンジン開発で講演会

現場の声を230人が聴講

青梅法人会源泉部会が市民講座

青梅法人会源泉部会が主催する西多摩市民講座が1月16日、プリモホールゆとろぎ（羽村市緑ケ丘）小ホールで開催された。IHI航空・宇宙・防衛事業領域ロケット開発事業推進部長の三原礼さんが「ロケットエンジンを開発するということ」をテーマに宇宙事業について語った。

三原さんは、国際宇宙ステーション補給機「こうのとり」、小惑星探査機の「はやぶさ」の帰還カプセルなどの話なども交え、ロケットエンジンのメカニズムなどを解説。高い性能性と運用性、コスト低減に挑んできたロケット開発の現場を紹介。

「ロケットの打ち上げというと華やかなイメージだが、ロケットエンジンの製造と言っても特別なものではなく、部品を1つ1つていねいに作ることの積み重ね。やっていることはものづくりと同じ。考え抜いても答えが出ない神様の領域と言ってもいいものがある」と開発者の心境を明かした。

冒頭、同社瑞穂工場の説明があり、産業ソリューション、社会インフラ、航空宇宙開発、エネルギーなどの分野で、ものづくりへの飽くなき挑戦と高度なエンジニアリング力で、産業と社会の発展に取り組んでいることが紹介された。

会場では宇宙やロケットに興味を持つ高校生から大人まで230人ほどが訪れ、熱心に耳を傾けた。昨年4月から青梅市に移転している日本航空大学校からもトータルモビリティ工学科学科長の松尾史朗さんの引率で20人の学生が参加した。

松尾さんは「講演はIHIのことやロケット技術、エンジニア人生と多岐にわたり、最後は神の領域にまで及ぶ大変内容の濃いものだった。学生たちは、スーパーエンジニアになるということ、ものの仕組み、動きを〝なぜかな〟という目でしっかり考えることを学んだようだった」と感想を語った。

また、当日一番乗りで会場を訪れた女性は、「主人がIHIに勤務していて、今は遠くに単身赴任している。主人に会うような気持で早く来てしまった。IHI瑞穂工場に勤務し、河辺に住んでいた宇宙飛行士の野口聡一さんのこともよく知っている。きょうは来てよかった」と話していた。

開発の現場を語る三原さん